ユディット書

本書の記者は一般に、大司祭エリアキム（またヨアキムとも稱する）であると信じられているこの中に述べてあることは、大方彼の時代、即ちマナッセが悔悛、俘囚より帰還後の治世に起つたものであるらしい。本書は、イスラエルの子等がホロフエルネスとその大軍に攻められ、滅亡の危機に臨んだ時、己の德と剛毅と祈禱の力でこれを救つた名高い勇婦ユディットに因んで命名され、彼女の天主に感謝する歌で終つている。

第一章

アッシリア王ナブコドノソル、メデア王アルファクサドを征服し諸國に使者を遣る。

一 茲にメデア人の王アルファクサド[1]は多くの國々を討ち従えて己が權下に収め
二 エクバタナと稱ぶ最堅固なる城市を建つるに、四角の切石を以てしけるが、彼が造り成せるその石垣は、幅[2]七十クビ

第一章 1) アルファクサドという名はメデアの列王表中に見當らないが、西紀前六五五年に父デョケスの後を繼いでメデアの王位に即いたフラオルテスと同一人で、アッシリア王アッスルバニパル（六六七—六二七年）と同時代の人であつた。 2) ヘロドトによれば、バビロンの石垣は同じ幅を有していたと。

三　ト、[3]高さ三十クビトあり、また彼が築きしその塔は高さ百クビトありき。三なお是等は正方形にして、各邊の長さ二十呎に及ぶ。彼またその門を堺の高さに造りなしたり。四しかして彼、力ある者の如く、その軍勢の威力とその戰車の堂々たるを誇れり。五さる程に彼が統治の第十二年に、大都市ニニヴェにありて世を治めたりし、アッシリア人の王ナブコドノソル、[4]アルファクサドと戰いて之に勝ちしが、六そはエウフラト河、ティグリス河、及びヤダソン河[5]の周邊にありて、ラガウ[6]と稱ばるる大平野、即ちエリク人の王エリオク[7]の平野に於いてのことなりき。七是よりナブコドノソルの勢威益々揚りしかば、その心高ぶり、彼、キリキア、ダマスコ、及びリバノンに住むすべての者の許に人を遣し、[8]八なおカ

4)「ナブコドノソル」とは、エジプトのファラオの如く、バビロン及びアッシリア諸王に共通の名稱で、「ネボ、王冠を護り給う」の義。ネボはこの王が君臨していたバビロンの一つの神。―5)ヤダソン河はギリシャ名をヒダスペスと稱し、スサを貫流している。6)この地方は、ラゲスのある「ラギアナ」地方にほかならない。土―7)エリク人とは一・一―六参照。―8)文章前後のメデア南部の州、エラムの住民。エリオク（アリオク）はそこによくある王の名前。―8)文章前後の關係から見れば（一〇―一二節参照）、このアッシリアの使者達は、本節以下に名をあげてある諸地方

3)一クビトは約五十センチメートル。―

九　ルメル及びケダル9)に在る民、並にガリレアのエスドレロンの大平野なる住民の許、九またサマリア、及びヨルダン河の彼方イェルサレムに及ぶまで、並にエチオピアの國境10)に至るまでのイェッセ11)の全地に在るすべての者の許にも人を遣せり。一〇アッシリア人の王ナブコドノソルは、遍く是等の者の許に使者を遣しけるが、二彼等いずれも意を一にして拒み、之を空しき儘に12)追い返し、禮遇せずして斥けたり。一三是に於いてナブコドノソル王、その全地に對して怒り、是等すべての地方に仇を報いんことを、己が位と王國とによりて誓いぬ。

第二章

ナブコドノソル西方諸國を荒らさんとてホロフエルネスを派遣す。

一　ナブコドノソル王の第十三年1)第一月の二十二日に、ア

に、直接服從を强要するのを使命としていた。—9)ケダル（ギリシヤ名ガラード）は、イスマエル（創二五・一三）の子孫が住んでいた處で、アラビアの荒野の中にあつた。—10)エジプトの南。—11)「イェッセ」とは紅海とナイル河との間にあるゲツセン（ゴーセン）の地。創四七・一を見よ。—12)舊約聖書では通例禮物は服從の印であり保證である。

第二章　1)西紀前六三三年頃。

ツシリア人の王ナブコドノソルの館に於いて、復讐せんとの勅下れり。

二　即ち彼、すべての長老、諸將、及び己が戰士等を召して、彼等と共に祕

三　密會議を開き、わが志は天下を悉く討ち從えてわが權下に牧むるにあ

四　り、と云えり。この言すべての人の意に適いしかば、ナブコドノソル王

五　すなわち軍の總帥ホロフェルネス2)を召して、之に云いけるは、「出でて

六　西方の諸王國、殊にわが命令を輕んじたる國々を攻めよ。汝の眼いずれ

七　の國をも見遁すべからず、汝堅固なる邑々を悉く我に服わしむべし。」と。

八　是に於いてホロフェルネス、アッシリア人の軍勢の諸將高官を招き、王

九　の己に命じたる如く、出征の人員を調べしに、歩兵十二万、騎馬の射手一

一〇　万二千ありき。八彼、軍勢に足る夥しき糧食を負わせたる數知れぬ數多の

駱駝、ならびに無數の牛の群、羊の群を出征の全軍の前に先發せしめたり。

九彼、その通過に當りて、シリア全土より穀物を徴發せしむることとなし

たれど、一〇金銀は之を王の館より甚だ多く取出せり。こかくて自ら全軍を

これより先、マナツセ王は捕虜としてバビロンに引かれていたので（代下三三・一一）當時ユダ国には王がいなかつた。

2) この名はデイアドク時代には屢々あつた。デイアドクとはアレクサンデル大王の諸將のこと

率い、戰車、騎兵、射手等を從えて征途に上りけるが、是等は蝗の如く地の面を覆いたりき。一二やがてアッシリア人の境を過ぐるや、キリキアの左にあるアンゲ3)の大山嶺に至りて、そのすべての城を乘取り、要害を悉く占領せり。一三またその名も高きメロトの市をも攻略り荒野の眞向、及びケロンの地の南に在る、すべてのタルシスの子等とイスマエルの子等とを掠めたり。一四しかして彼、エウフラト4)を渡りてメソポタミアに入り、マンブレ川5)より海6)に至るまでその地にある大なる市々を陷いれ、一五そのキリキアより南方にあるヤフェトの界7)に及ぶ邊境の地を占取せり。一六かくて彼はマディアンの子等を悉く曳き去り、その財産をすべて奪い、且己に抵抗する者をば皆劍の刃にかけて殺せり。一七その後彼は刈入れの頃、ダマスコ8)の平野

3) アンゲはタウルス山脈の一部
4) 彼はその間に、アッスルバニパルの兄弟サンムゲスの叛亂を鎭壓するため帰つて來ていたがそれからた記の出征を續行したのである。
5) エウフラト河の支流。
6) 或人々はこれをペルシヤ灣と、また或人々は地中海と解している。
7) 「ヤフェトの界」とは、アラビア嶢角（ぎようかく）地方に境を接する地方と解すべきである。
8) ダマスコはシリアの首都であつた。上記の諸所は、占領順に書いたのではなく、ただ遠征軍が漸次パレスチナに押し寄せるまでに到つた北や南の國境の地点を順序不同に擧げてあるに過ぎない。

一八　に下り行き、すべての穀物を焼き拂い、また樹木と葡萄樹とを切り倒さしめたり。一八　されば彼を恐るる念、その地のすべての住民を襲いぬ。

第三章

ホロフェルネスに降服する者多かりしが—彼その人々の街々を滅ぼす。

一　是に於いて、すべての市々及び州々、即ちシリア、メソポタミア、シ
リア・ソバル、1) リビア、2) ならびにキリキアなどの王侯等、使者を遣
し、ホロフェルネスの許に至りて云わしめけるは、二我等に對して憤る
をやめよ、蓋し我等奴隷の憂目を見て死し、且滅ぶるよりは、生存えて
ナブコドノソル大王に事え、汝に服うこそよけれ。三我等がすべての都
市、すべての領地、すべての山岡平野、牛の群、羊、山羊、馬、駱駝な
どの群、また我等がすべての財産眷族、擧げて汝の眼前にあり。四我等
の屬有は悉く汝のままなれ。五我等も、また我等の子等も、汝の奴僕な
り。六汝平和の主君として我等に臨み、汝の意の儘に我等の勞を用い給

第三章　1) ソバルはソバ、すなわちニシビス。2) アフリカにあるリビアは遠すぎて到りかねるので、小アジアの州であるリチアかリディアの誤記であろう。

七　え。」と。七彼乃ち騎馬の大兵力を率いて山より下り、その地の
八　すべての都市とすべての住民とを掌握し、八またいずれの邑よ
九　りも、剛勇精鋭の闘士を補助兵に採れり。九かくて大いなる恐
一〇　怖それらの州々に臨みたれば、すべての邑の住民は、諸侯も貴
族も、また平民も、齊しく彼の來るを出で迎え、一〇花冠、炬
一一　火、舞踊、また鼓や笛などを以て之を歡迎せり。一一さりながら
彼等かく爲したれども、彼の心の兇暴性は之を柔ぐること能わ
一二　ざりき。一二蓋は彼、なおも彼等の市々を荒し、その並木を[3]伐
一三　倒したればなり。一三蓋し地のあらゆる神々を毀つべしとは、ナ
ブコドノソル王が彼に命じおきたる所にして、是即ちホロフェ
ルネスの力により討服えたる諸國の民に、已獨神と稱ばれん
一四　爲なりき。[4]一四さて彼はシリア・ソバルの全土、アパメア[5]の
全土、及びメソポタミアの全土を過ぎて、ガバーの地[6]に在る

3)「並木」は屢々女神アスタルテ像という代りに用いられる語。王上一八・一九を見よ。―書二・一。

4)神士二・一三參照。―

5)シリアの一州。―

6)「ガバーの地」（高地）とはパレスチナの北西部にある山岳地帶をさす。―ギリシャ語本によれば、彼はドタイン（王下六・一三）を過ぎてエスドレロンの平

一五　エドム人の許に至り、一五その諸市を取りて三十日の間其處に居りしが、その間彼は命じてその全軍の兵力を一つに集結せしめ置きたり。

第四章

イスラエルの裔等ホロフェルネスに對して抗戰の準備をなし、主の御祐助を請い求む。

一　一時にユダの地に住めるイスラエルの裔等、是等の事どもを聞きて、太く彼を恐れたり。二　彼が他の諸市とその神殿とになしし事をイエルサレムと主の聖殿とにもなさざるかとの憂慮と懸念、彼等の心を捉えしなり。[1]三　されば彼等、人を遣して遍くサマリアを歷りイェリコにまで至らしめ、すべての山の頂を前に占領しおき、四　己が邑〳〵に石垣を繞らし、穀物を集めて戰爭に備えたり。五　また司祭エリアキム[2]は、ドタインに近き大平野に面せる野に入り、ゲルボエ及びスキトポリス、即ちベトサンに向かい、そこで自軍を糾合しようとした。

第四章　1)ギリシャ語本「それ、彼等は暫く前に俘囚より上り來りこの頃に至りてユダの民相集まりかくて什器類、祭壇、聖殿の俗用に供せられたるを聖化したり。」2)大司祭エリアキム（一五・九のヨアキム）は、マナッセ王がまだバビロンにいたので、無上の勢力を有していた。

エスドレロンの向いに居るすべての人々の許、及び通路に當ることあるべき所
六 のすべての人々の許に書を送りけるが、六是、彼等をして、苟もイエルサレム
に至る途となるべき、山々の上り口を占有せしめ、山に挾まれて道の狹まれる
七 處を、守らしめん爲なりき。七イスラエルの裔等乃ち主の司祭エリアキムの彼
八 等に命じたる如くになし、八民皆大なる熱誠こめて主に呼わり　自らもその妻
九 等も、心を卑うして斷食し、且祈れり。九司祭等は毛衣(3)を纏い、小兒等をし
一〇 て主の聖殿の前に平伏さしめ、主の祭壇をば毛布もて覆い、一〇意を一にして主
イスラエルの天主に向かい、わが小兒等が犧牲となり、わが妻等が分ち取られ
一一 わが諸市が滅ぼされ、その聖所が瀆され、且我等が異邦人の笑草となるが如き
一一 ことならしめ給え、と呼われり。一一時に主の大司祭エリアキム、イスラエル
一二 の全土を歷り、彼等に語りて、一二云いけるは、「汝等知れ、汝等もし堅忍以て
一三 主の御眼前に、斷食と祈禱とを續けなば、主は汝等の祈願を聽容れ給わん。
一三 主の僕なるモイゼを憶え、彼は己が勇猛と力と軍勢と、楯と戰車と騎兵とを

3) ヨナの時代にニニヴェの人々がしたように。拿三・七―八参照。

一四　恃みとしたるアマレク人に、剣もて闘うことなく、聖なる祈願によりて打ち勝てり。[4]　一四汝等もし汝等が始めたるこの業を續けなば、イスラエルの

一五　敵は皆かくの如くなるべし。」と。　一五彼等乃ち彼のこの奬勵に從いて主に

一六　祈りつつ主の御眼前に留り、一六主に燔祭を献ぐる人々までも毛衣に帶し、

一七　その頭に灰を被りて[5]主に犧牲を献げたる程なりき。一七かく彼等皆、主が

その民イスラエルを顧み給うように、その誠意を盡して天主に祈れり。

第五章

アキオル、ホロフェルネスにイスラエルの民のことを語る。

一　一さてイスラエルの裔等が抗戰の準備を整え、山々の通路を封じたる由、

二　アッシリア人の軍勢の總帥、ホロフェルネスに傳えられしかば、二彼、大

三　いに激して烈しき怒に燃え、モアブの諸侯とアンモンの諸將と[1]を召して

三之に云いけるは、「我に告げよ、山々を占領せるかの民は如何なる者共

ぞ、またその諸市は何々、如何なる樣、如何なる大いさなりや。更にその

4) 出一七・一二。—5) ギリシャ語本には「その頭帽の上に」とある

第五章　1) モアブ人とアンモン人とはイスラエル人に敵意を抱いていた。彼らは

力は如何に、その數は如何に。またその軍勢の總帥は何人なるか。2)

四　わけても東方に住める者共が我等を侮り、我等を穩かに承入れんとて出で迎えざるは何故ぞ。」と。五　時にアンモンのすべての裔等に將たるアキオル、答えて云いけるは、「わが主君よ、汝もし聽き給わば、我汝の御眼前にて、山々に住めるかの民に就き、眞相を告げん

六　我、わが口より虛僞の言を出さざるべし。六　かの民はカルデア人の血統より出でたり。3)七　彼等は舊メソポタミアに住めり、其はカルデア人の地に居りしその父祖の神々に從うを好まざりしが故なり。

八　されば彼等は多神崇拜なりしその父祖の典禮を棄てて、九　天の唯一神を崇めけるに、その神また彼等に、彼處を去りてカラン4)に住むことを命じたり。然るに饑饉全地に遍かりし時、彼等エジプトに下り行きしが、彼等にて四百年の間に彼等殖えに殖えしかば、その軍勢は數うること能わざるに至りぬ。一〇　さる程にエジプト王彼等

自發的にホロフェルネスに服從したのでその軍勢の中に澤山いた。―2)彼はこういうことを知らない譯ではなかつたが、それでもこれらイスラエルの敵なる彼らからよくその說明を聞き、援助を得ることができると思つた

3)アブラハムはカルデアのウル出身であつた。―4)七十人譯は「カナアンの地」。

を虐げ、粘土と煉瓦とを以て己が邑々を建つる時、之を奴隷として使役するに及び、彼等その主に向かいて呼わりしに、彼、種々の禍もてエジプトの全土を一一擊てり。これよりてエジプト人彼等を己が許より逐い出しけるが、災厄即ち熄みしかば、またもや彼等を捕え、曳き帰りて再び勞役に服せしめんとしたるに、5)

一二彼等の逃ぐるに當りて、天の神之が爲に海を開きたれば、水、此方彼方に石一三垣の如く凝固まり立ちて、彼等足を濡らさず、海の底を歩み渡れり。6) 一三やがてエジプト人の無數の軍勢、彼等を追いてその所に來りしが、忽ち水に呑まれて、その出來事を子孫に語り傳うべき、ただ一人の者すら殘らざるに至りぬ。

一四さて彼等は紅海より出で來るや、シナイ山7)の荒野に據れり、是は決して人一五の住むを得ず、また曾て人の子の居着きしことなき處なり。一五彼處の苦き泉は甘くなりて8) 彼等の飲むに適し、四十年に亘りて彼等天より糧を受けたり。

一六彼等弓矢を佩びず、楯、劍を携えずして、何處に行きても、その神彼等の爲に戰いて勝利を得たりき。一七されば彼等がその神なる主を崇むるを已めし時の

5) 出一二・三。
6) 出一四・二九。
7) 普通シナイという。
8) 出一五・二三以下

一八　外は、この民を侮る者あらざりき。[9]
一八　されど彼等その神の外に、他の者
を崇むるや、その都度、掠奪にあい、双にかけられ、恥辱に陥いれられた
一九　り。一九さりながら彼等その神の禮拜をやめしことを悔ゆるや、その度にま
二〇　た天の神は、彼等に抵抗する力を與えたり。二〇かくて遂に彼等はカナアン
の王、イェブスの王、フェレズの王、ヘトの王、ヘヴの王、アモルの王、
及びヘセボン[10]の權力ある者を悉く倒して、その國々とその諸市とを獲た
二一　るなり。二一彼等、その神の眼前に罪を犯さざる間は、彼等に幸運ありき、
二二　蓋し彼等の神は不義を憎むなり。二二この數年前にも、彼等は神が之に與え
て歩ましめんとしたる道を離るるや、戰いて數多の國民に打破られ、その
二三　多くは捕えられて、二三されど己が國にあらざる土地に曳き行かれたりき。[11]
どこの頃彼等はその神なる主に立歸り、散り散りになりて居りたるさまざ
まの處より、また相集まりてかの諸々の山に上り、彼等の聖所のあるイェ
二四　ルサレムを再び獲たり。二四されば今、わが主君よ、調べ給え、もし彼等の

9) この例は士師記に出ている。―10) ヨルダンの東岸の地にあり、イエリコに對す「セホンの町」の義。―11) ユデア人がエジプト人やアッシリア人に敗れて俘囚になつたことをさす。

二五 神の眼前に、彼等に不義あらば、我等彼等の許に攻め上らん、其は彼等の
神、必ず之を汝に付し、彼等汝が権力の軛の下に服すべければなり。二五然
れども、もしこの民その神の前に科なくんば、我等之に抵るを得ず、其は
二六 彼等の神之を護りて、我等天下の物笑いとなるべければなり。」と。二六ア
キオルかく云い終るや、ホロフェルネスの大将等いずれも怒りて彼を殺さ
二七 んと欲し、互に云いけるは、二七「イスラエルの裔等は、武器もなく、力も
なく、戰術をも知らざる人々なるに、ナブコドノソル王とその軍勢とに手
二八 向うことを得と云う、この者はそも誰ぞ。二八されば、アキオルをして、その
我等に云いし言の誤謬なるを知らしめん爲に、いざ我等かの山々に攻め上
らん。彼等の中の力優れし者共を捕えたらん曉には、それと共に彼をも剣
二九 もて刺し貫くべし。二九これ、いずれの國民も、ナブコドノソルが地上の神
に在し、彼を除きてまた他に是あらざるを知るに至らんためなり。」と。12)

12) 本三・一三参照。王を神に祀りあげてこれを國家統一の中心とするつもりであつたが、それはイスラエル民族の神政政體との戰爭に敗れて水泡に帰した。

第六章

ホロフエルネス大いに怒りてアキオルをベトウリアに送る。

一 さて彼等語ることをやめし時、ホロフェルネス烈しく怒りてアキオルに云
二 いけるは、三汝我等に預言して、イスラエルの國にはその神の加護あり、と
三 云いたるに由り、ナブコドノソルの外に神なきことを汝に示さん爲に、三我
四 等彼等を一人の如く鏖殺にしたらん曉には、1) 汝も亦彼等と共にアッシリア
人の刃にかゝりて亡ぶべし。かくてイスラエル皆汝と共に滅びん。四是に及
五 びて汝ナブコドノソルの天下の主君に在すことを悟るに至るべし。2) わが兵
六 卒の劍は汝の脇腹を刺し貫き、汝は刺し貫かれてイスラエルの負傷者の中に
五 仆れ、最早息を吹き返すことなくして終に彼等と共に滅び去らん。五然れど
六 も汝もし汝の預言を眞と思わば、汝の面を伏するなかれ。また汝もしわが是
五 等の言が成就することあらじと信ぜば、汝の顏を覆える蒼白めし色を汝より
六 去らしめよ。六さて汝も彼等と共にかかる憂目を見るべきことを知らん爲に

第六章
1) この事は一人の頭に下る如く、イスラエルの頭上に落ちかかるであろう。
2) 本三・一三。五・二九参照。

視よ、今より汝をかの民の中に加えん、これ、彼等がわが劍によりて當然の罰を蒙らん時、汝も亦等しく復讐を受けんためなり。」と。七ホロフエルネス乃ちその臣僕に、アキオルを捉え、ベトウリア3)に曳き行きてイスラエルの裔等の手に付す事を命じたり。八よりてホロフエルネスの臣僕等、彼を捉えて平野を通り行きけるが、山に近づくや、石弓を射る者共、彼等に向かいて、出で來れり。九是に於いて、彼等山腹を離れ、アキオルの手足を樹に縛りつけ、かく之を縄もて縛めしまま遺し置きてその主君の許に歸りぬ。一〇然るにイスラエルの裔等はベトウリアより下り來りて彼の許に至り、之を解き放ちてベトウリアに連れ行き、民の中央に立たしめ、そも何事ありてアッシリア人が彼を縛め置去にしたるかを之に問えり。一一この頃その地の長は、シメオン族のミカの子オジア、及びゴトニエルとも稱するカルミなりき。4)一二さてアキオルは長老等の中央、すべての人の眼前にて、己がホロフエルネスに問われて云いし一

3) ベトウリアの城市はガリレアにあつて、ゲネザレト湖から遠からず、イツサカル族領内にあつたらしいが、そのありかはこれ以上詳しくわかつていない。

4) オジア及びカルミは、マナツセがユダの要塞に配置した二人の侯伯であつたらしい。

切の事と、その言の爲にホロフェルネスの民が己を殺さんとしたる次第とを語り、一三またホロフェルネス自らもその故に怒りて彼をイスラエル人に付すべしと命じ、以てイスラエルの裔等に勝ちたる曉、「天の神は彼等を護る者なり。」と云いし廉にて、アキオルをさまざまに責め苦しめて殺さしめんとしたる次第をも語れり。一四アキオル是等の事どもを悉く打明くるや、民皆平伏して主を禮拝し、諸共に泣き悲しみつつ心を合せ、主に己が願を披瀝して、一五云いけるは「天地の神なる主よ、彼等の傲慢を眺め、我等の貧しきを欝し、汝の聖者等[5]の顔を顧み給いて、汝に依頼む者は汝之を見棄て給わず、己を恃み己が力を誇る者は汝之を辱しめ給うことを示し給え。」と。一六かくて人々泣きやみ、民の終日の祈禱果つるや、彼等アキオルを慰めて、一七云いけるは、「我等の父祖の天主は、汝その御力を稱えたるに由りて、汝が却つて彼等の滅亡を見るようからい給うべし。一八また主我等の天主、その僕等にこの自由を與え給わん時、天主我等の中にてまた汝とも共に在せ。これ、汝の意のままに、汝も汝のすべ

5) 割禮と律法とによつて聖となり汝のものとなつた人々。

一九　ての眷族も、我等と交わるを得んためなり。」と。[6]

二〇　一九時にオジア、會議終るや彼を己が家に迎えて之が爲に大いなる饗應を爲し、二〇長老等をも悉く招きけるが、斷食果てたれば彼等相共に飲食せり。

二一　三その後民皆召集められて、終夜會堂[7]の中にて祈り、イスラエルの天主の御祐助を願いぬ。

第七章

ホロフェルネス、ベトウリアを圍み水道を斷つ—圍まれたる者の苦しみ。

一　茲にホロフェルネスは次の日その軍勢に命令を下して、ベトウリアに攻め上らしめたり。二さてその歩兵は十二万、騎兵は二万二千にして、外に州々邑々のすべての壯丁の中より、捕われて連れ行かれし者共の豫備隊あり。[1]三彼等いずれも齊し

[6] 彼はその公明正大と受難（九節）の報いとして、すぐさまイスラエルの民の中に加えられ、その國民權を悉く與えられた。これは普通ならアンモンの裔等が十代目になつて漸く許され得ることであつた。—[7] シナゴグ、すなわちユデア教の会堂、または彼らが祈るため集合する所を云う。

第七章　[1] 彼が有する軍勢は、召集の際既に雲霞の如くであつたが、それが途中一層增加した。

くイスラエルの裔等と闘う爲に身仕度を整え、山腹よりドタインを望む頂に來り、ベルマと稱ばるる處よりエスドレロンの前にあるケルモンに至れり。[2)]

四 されどイスラエルの裔等は、彼等の大軍を見るや、地に平伏して頭に灰を被り、心を一にして、イスラエルの天主がその民に御憐憫を示し給わんことを祈り求めたり。五 しかして彼等已が武器を執り、通路が山々に挾まれて狹き小徑となれる所に據り、晝も夜も斷えず之を守れり。六 然るにホロフェルネスは周圍を巡回りて、流れ入る泉が市外の南方より彼等の水道を通ることを知りしかば、命じてその水道を斷たしめたり。七 されど石垣より程遠からぬ所に泉ありて、見れば彼等窃かに之より水を汲み、飲み飽くと云うよりは寧ろ僅かに渇を止め居れり。八 時にアンモン及びモアブの裔等ホロフェルネスに謁えて云いけるは、「イスラエルの裔等は、槍や矢を恃まず、山々こそ彼等の防護、崖なす嶮しき丘こそ彼等の堅壘たるなれ。九 されば汝、戰いを交えずして彼等に勝つを得ん爲に、泉の邊に番兵を置き、彼等の之より水を

2) まだ正確にその場所を突きとめることはできないがホロフェルネスは既にベトウリアを迂回して四方八方から一時に攻撃しようと思っていた

汝むことなからしめ給え、さらば汝劍を用いずして彼等を殺すを得ん、
然らずとも彼等必ず困憊れて、山中に位するが故に攻め落す能わずと思
一〇 い居るその都市を明渡すに至らん。」と。一〇 是等の言ホロフェルネス及び
その側近の人々の意に適いしかば、彼各々の泉の周圍に、百人ずつ配置せ
一一 り。[3] 二 この見張、滿二十日に亘るや、ベトゥリアの住民に水槽の水及び
貯えの水盡きて、今は市内に一日を支うるに足る水すらなきに至りぬ、是
一二 日々民に水を量り與えたるに由りてなり。[4] 三 時に男も女も、若者も小兒
一三 も、擧りてオジアの許に集まり、皆齊しく聲を揃えて、 一三 云いけるは、
「願わくは、天主我等と汝との是非を定め給え、蓋し汝はアッシリア人と
一四 隱やかに語らうことを欲まずして、我等に禍を齎せり。この故に天主また
我等を彼等の手に賣り渡し給えり。一四 されば汝こそ我等渴にあさましく亡び
一五 んとして、彼等の眼の前に倒れ伏せる時にも、我等を助くる者なきなれ。
一五 よりて今、汝、市内にある者を悉く集めよ、さらば我等皆進みてホロフ

3) 城市はかかる大軍の猛攻を受けては、到底支えきれなかつたであろうが、天主の御攝理によつて、ホロフェルネスは誤まつた策の方を用いた。

4) 今日の戰時中の食糧配給と食糧難とを思い合わせよ

一六　エルネスの民に身を付さん。一六蓋し我等が捕虜となりて生存え、主を稱うるは、我等の妻子の死するを目のあたり見たる後、已も死してすべての肉の笑い草とならんよりは優れり。一七我等今日天地及び我等の罪に應じて我等に報復い給う我等の父祖の天主を呼びて證者となし、汝等をして直にこの市をホロフェルネスの軍勢の手に付さしめんとす、是、渇きに渇きては

二三 せり。三時にオジア涙を流しつつ起上りて云いけるは、「同胞よ、心を勵
二四 まして、我等この五日の間主よりの御憐憫を8)待たん。二四蓋し主大方は御
二五 憤怒を止めて、御名に光栄あらしめ給わん。二五されどもし五日を経て御祐
助来らずば、我等汝等の云いしその事どもをなさん。」と。

第八章

ユディットの性質と、その長老等に對する談話。

一 一然るに是等の言を、メラリの娘なるユディット、聽くに至れり。因
みにメラリはイドクスの子、これはヨゼフの子、これはオジアの子、これ
はエライの子、これはヤムノルの子、これはゲデオンの子、これはラファ
イムの子、これはアキトブの子、これはメルキアの子、これはエナンの子、
二 これはナタニアの子、これはサラティエルの子、これはシメオンの子、こ
れはルベンの子1)なり。二その夫はマナッセなりしが、大麥の刈入時に死
三 せり。三即ち彼畑にて麥の穗を束ぬる人々を監督し居りしに、暑熱に頭を

8) 天主が雨を降らせ給うのを。

第八章 1) ユディット、マナッセ、オジア（六・一一）はシメオン族の出身であるから、ベトウリアはシメオン人が住んで

四　冒されたるなり。彼已が市ベトゥリアにて死し、2) 其處に於いてその父祖の許に葬られたり。

五　さて後に殘りしユディットは、寡婦となりて既に三年六箇月を經しが、

六　その家の上部に已が爲一の密室を設え、婢等とその中に籠り居て、

七　その腰に毛布を纏い、安息日、新月、及びイスラエルの家の祝日の外は、3) 生くる日の限り4) 大齋せり。

八　彼女は眉目甚だ美しく、その夫は之に大いなる財産と、夥しき召使等と、數多の牛羊の群などの所有物とを遺せり。

九　彼女は太く主を畏れしかば、萬人に評判高く、一人として之を悪しざまに云いなす者あらざりき。

一〇　さて彼女、オジアが五日の後に市を明渡さんと約束したる由を聞くや、長老カブリ及びカルミ5) の許に人を遣せり。しかして彼等がその許に來るに及び、彼女之に云いけるは、「もし五

いた所で、彼らが防衛したのらしい。―2) 彼は日射病で仆れたのである。これはパレスチナに他の所よりも多く起り、突然死の轉機を取る。―3) 聖會は節制や大齋を大いにすゝめているがそれでも本節のユディットのように、やはり主日や祝日は感謝歡喜の日として、その大齋の掟から除外している。―4) 律法所定の七日間（創五〇・一〇）より長く服喪するのは、故人に對する特別な敬愛のしるしとされていた。―5) この兩者を始めとして、一二八節でわかるように、またオジアの許にも。

日の内に援助我等に來らずば、アッシリア人に城市を明渡すことを、オジアが承諾したるかの言は何ぞ。一一 汝等何者なれば主を試みるや。一二 この言は御憐憫を喚起すものに非ずして、寧ろ御怒を招き、御憤を燃やすものなり。一三 汝等は主の御憐憫に期限を設け主に對して汝等の好むままに日を定めたり。一四 されど主は忍耐深く在せば、我等この事を痛悔し、涙を流してその御宥恕を乞い奉らん。一五 蓋し天主は人の如くに威嚇し給わずまた人の子の如く怒に燃え給わざるなり。一六 是故に我等その御前に己が心を卑うし、謙れる精神もて彼に事え、一七 泣きながら主に向かいて、その御旨のままに我等に御憐憫を施し給えと奏し上げん。是、彼等の傲慢によりて我等の心擾されたる如く、また我等己が謙遜を誇りとせん爲なり。一八 夫れ、我等は我等の父祖の、その天主を棄てて他の神を拜みたる罪に倣わざりき。一九 彼等はその罪惡ゆえに見棄てられて、刄にかけられ、掠奪にあい、その敵より侮辱を蒙れり。されど我等は主を除きて他に天主なきを知る。二〇 いざ我等謙りて主の御慰藉を待たん。さらば主我等の天主は、我等を惱ます敵に我等の血の復讐をなし、我等に立ち逆うすべての民を降服せしめ、之を譽なきものとなし給わん。

二一　三されば今、同胞よ、汝等は天主の民の長老にして、彼等の生命はひたすら汝等に繫りて存するに由り、6)　汝等說きて彼等の心を勵ますべし、これ

二二　彼等が我等の父祖の試みられしは、實にその天主を崇め居たるかを、身を以て知る目的なりしことを憶ゆるに至らんためなり。三彼等は我等の父アブラハムが如何に試みられ、多くの患難に錬えられて天主の友とせられしかを憶わざるべからず。

二三　イサークも然り、ヤコブも然り、モイゼも然り。凡そ天主の御意に適いたる人々は、皆多くの患難を經て忠實を守りしなり。7)

二四　二四されど主を畏れつつ試錬を受けずして、己が短氣を現し、主に對する己が不平より怨言を吐く者は、二五滅ぼす者に滅ぼされ、蛇によりて殺されたり。8)

二六　二六されば我等はかかる憂き目に逢いても、怨を以て報いじ。

二七　二七却つて是等の苦罰が我等の罪に對しては輕きに過ぎたりと思い、我等が下僕の如く懲らさるるこの主の鞭の下りしは、我等を改心せしめん爲にして、我等を滅ぼさん爲に非ざるを信ぜん。」と。

二八　二八オジア及び長老等彼女

6) ベトウリアは全國の鎖鑰（さやく）。
7) イサークは父が之を犧牲に供しようとした時、モイゼはマディアンに逃げた時（出二一五）、それぞれ試みられた。
8) 哥前一〇・九。民二一・六。

に云いけるは、「汝が語りし事はすべて眞なり。汝の言には一も咎むべき所
二九 なし。二九されば今、汝我等の爲に祈れかし、汝は聖女にして、天主を畏るる
三〇 者なればなり。」三〇ユディット彼等に云いけるは、「汝等、わが語るを得し事
三一 の天主より來れるを知る如く、三一またわがなさんと欲する事も天主より出で
三二 たるかを試し見よ、天主のわが志を堅うし給わんことを祈れかし。三二我が
わが婢9)と共に出で行くを得んために、汝等今夜門の所に佇みおるべし。然
る後汝等、己が云いし如く、五日を經なば主がその民イスラエルを顧み給わ
三三 んことを祈れ。三三されど我は汝等の、わが爲さんとする所を探るを欲せず。
ただ我が汝等に告げ知らすまでは、ひたすらわが爲主我等の天主に祈るべ
三四 し。」と。三四ユダの侯オジア彼女に云いけるは、「安んじて行け、10)願わくは
主汝と共に在して、我等の敵に仇を報い給え。」と。かくて彼等歸り行きぬ。

9) 同志なる婢。本一三・一一。一六・二八參照。

10) 聖會が典禮中その他祝福の際に屢々用いる語。

第九章

天主の御祐助を求むるユディットの祈禱。

一　彼等立去るや、ユディット已が祈禱室に入りて、毛衣を纏い、1)
二　頭に灰を戴き、主の御前に平伏し、主に呼わりて云けるは、
三　わが父シメオンの天主なる主よ、汝は彼に劍を與えて、他國の者共を禦がしめ給えり、そは彼等汚らわしき情慾に驅られて、處女をけがし、之を裸にして辱しめたればなり。2)
四　汝はまた彼等の妻等を獲物とし、彼等の娘等を捕虜とし、あらゆる鹵獲物をば、汝の爲に努め勵みし汝の僕等に分ち給えり。
五　されば主わが天主よ、願わくは寡婦なる我を助け給え。
六　實に曾て有りし事を爲し、3)
かの事の後には之と案え定め給いしは汝にして、汝の欲し給いし事は必ず成れり。
五　夫れ汝の道は悉く備われり、しかして汝は御攝理によりて裁きを行い給いぬ。
六　汝、曾てエジプト人が、その戰

第九章　1)七十人譯によれば、「己が下に着おりし毛衣を脱ぎて」―すなわちそれを見せるように。―2)シメオンとレヴイが、己の姉妹デイナにシケムの加えた暴行に、血の復讐をしたその恥辱。創三四・二五以下參照。3)シケムの挿話にある出來事に對しはからい給うた。

車と騎兵と、兵士の衆きとを恃みて、武器を執り汝の僕等の後を追いし時、
七　その陣營を欝し給いし如く、今もアッシリア人の陣營を望見給え。4)
八　七　汝彼等の陣營を見渡し給いしに、暗闇彼等の力を奪い、八　冥海彼等の足を捉え、水
九　彼等を呑みたり。九　主よ、是等の者共も然ならしめ給え、そは彼等多勢を力
一〇　に、その戰車、投槍、楯、矢、槍などを恃みて、一〇　汝が我等の天主にして、
最初より軍を滅ぼし給う者なるを知らず、また汝の御名の〃主〃なるを辨え
一一　ざればなり。一一　最初よりの如く、汝の御腕を擧げ、汝の御力もて彼等の力
を挫き、汝の御忿怒によりて彼等の力を喪失さしめ給え、彼等は汝の聖所を
一二　荒し、汝の御名の幕屋を瀆し、汝の祭壇の角をその劍もて打ち落さんと、自
一三　ら誓いたればなり。5)　一三　主よ、その傲慢の、己が劍もて斷たるるようになし
給え。一三　我を見る彼の眼の罠に、彼を陷いれ、わが唇の愛らしきによりて彼
一四　を擊ち給え。一四　わが心に堅忍の德を與えて、彼を蔑ましめ、力を與えて彼を
一五　倒さしめ給え。一五　誓し、女の手彼を殪すに由り、是は汝の御名の記念となる

4) 出一四・九以下。
5) 主よ、彼らは聖所を辱しめんと來れり。

一六 べし。6)　一六主よ、夫れ、汝の御力は多勢によるにあらず、また汝の御旨は馬の力によるにあらず、傲慢なる者は最初より汝の御意に適わずして、謙遜柔和なる者の祈願は常に汝の好み給う所なりき。一七天つ御神、諸々の水の創造主、總べての被造物の主よ、願い且汝の御慈悲を恃みとする憐なる

一七

一八 我を聴き容れ給え。一八主よ、汝の契約を憶いて、わが口に言を授け、わが心の決意を固め給え、是、汝の家が聖なるままに存し、一九異邦人等が、汝の天主に在し、汝を除きてはまた他に之なきを知らんが爲なり。」と。7)

一九

第十章

ユディット敵陣に近づき捕えられてホロフェルネスの許に導かる。

一 一さて彼女は主に呼わることをやむるや、主の御前に平伏し居たる處より

二 起上り、二その婢を呼びて家の中に下り行き、毛衣を取去り、寡婦の喪服

三 を脱ぎ、三己が體を洗いて、之に最良の沒薬を塗り、その頭髪を分け、頭に頭帽を戴き、身に晴着を纏い、足に沓を履き、腕環なる百合、1)耳環、

6) 女の手にかかつて殪れるのは、武士の恥辱とされていた。—士四・二一。五・二六參照。

7) 本三・一三參照。

第十章 1) 百合花の形の腕環。

四　指環などを着け、あらゆる装飾品もてその身を飾れり。四剰え主も亦之に光り輝く美しさを添え給えり、其はかく装いを凝らしたるはすべて肉慾より出でしに非ずして、淑徳より出でたればなり。さればこそ主はその美しさを増して、彼女がすべての人の眼に、比類なく麗しと見ゆるほどになし給いしなれ。2)五かくて彼女はその婢に、葡萄酒の革袋、油の容器、灼りたる麥粉、乾無花果、パン、チーズなどを負わせて、出で發ちぬ。六やがて彼等市の門の所に至りしに、オジア及び市の長老等の待てるを見たり。3)七彼等は彼女を見るや、その美しきに太く驚嘆せり。八されど彼等は彼女に何事も問わず、ただ通らしめて云いけるは、「願わくは、我等の父祖の天主、汝に恩寵を賜いその御力もて、汝の心の策を強め、以てイエルサレムが汝によりて光榮を得、また汝の名が聖者義人の數に入るようなし給わんことを。」と。九しかしてその場にありし人々、皆聲を合せて、「然あれかし、然あれかし。」と云えり。一〇時にユディット主に祈りて、その婢と共に門を通り過ぎたり。二さて

2) 計畫の遂行をキリスト教道德の嚴しい要求に適わせようとするのは、救いの成就する前には、全く期待できなかった。

3) 本八・三二。

夜の明くる頃、彼女山を下りしに、アッシリア人の前衛之に逢い、彼女を止めて「汝何處より來り、又何處に行くや。」と云えり。

一二　彼女答えは、「我はヘブレオ人の娘なるが、彼等の許より逃げ來れり、そは我、彼等が汝等をあなどり、自ら進みて身を付し、以て汝等の眼前に憐憫を獲んとせざる故に、汝等の獲物となるべきを知るに由りてなり。4)

一三　是故に、我獨り思い、且云えらく、〃我はホロフェルネス將軍の御面前に赴きて、彼等の秘密を明し、いずれの途よりせば、その軍勢を一人だも損うことなくして彼等を捕え得るかを彼に示さん。〃と。」

一四　人々その言を聞くや、彼女の面を打目戍りしが、その眼は恍惚となれり、其は彼等、彼女の美しきに太く驚嘆したればなり。

一五　彼等彼女に云いけるは、「汝はわが主君に降るという、かゝる方策を取りしによりて、汝の生命を救えり。

一六　寔に、汝彼の眼前に立たば、彼、汝を好遇せん。しかして汝彼の心に最も適う者となるべし。」と。かくて彼等之をホロフェルネスの天幕に導き、その事

4) ユディットがこゝ及びホロフェルネスの前で、嘘を云ってもいいと思ったのは愛敵の掟を知らず、敵には眞實を云う義務がないとの怨すべき謬見に陷っていたため（聖トマの説）。書二・五參照。

一七 を彼に告げたり。一七彼女、彼の面前に入るや、忽ちホロフェルネスはその眼を
一八 奪われたり。一八その臣僕等彼に云いけるは、「かかる美しき女等をもてるヘブ
レオ人を、誰か蔑むを得ん。是等の報酬あるのみにても、我等彼等と戰わざる
一九 べけんや。」と。一九さてユディット、ホロフェルネスが紫と金とをもて織りな
二〇 し、綠玉及び種々の寶石を鏤めたる[5]榻に坐せるを見るや、二〇その面を仰ぎ
地に平伏して之に敬禮しけるが、ホロフェルネスの臣僕等、その主君の命によ
りて之を起たしめたり。

第十一章

ユディット、ホロフェルネスと語る。

一 一時にホロフェルネス、彼女に云いけるは、「心安かれ、汝の心に恐るるなかれ、ナブ
二 コドノソル王に事えんとする者は、一人だも我之を害せしことなければなり。二汝の民
三 またもし我を侮ることなかりしならば、我之に向いてわが槍を擧げざりしならんに。
三 但、今我に云え、汝が彼等の許を去りて、わが許に來らんと欲したるは何故ぞ。」と。

5) うるさい虫よけの幕がついている榻。

四　ユディット彼に云いけるは、「婢の言を聞き給え、蓋し、汝もし婢の言に従い給わば、主汝と共に在して事を成就し給わん。五　夫れ、天下の王ナブコドノソルは生き給う、またすべての迷える者を懲らさん爲に、汝にあるる彼の權力は活く、ただに人汝によりて彼に事うるのみならず、野の獸も亦彼に服う。六　蓋し汝の心の聰明なるは、諸國の民に喧傳せられ、彼の全國にて汝獨り慈悲ありて權勢あるは、遍く世に聞えたり、また汝の軍紀はすべての州々にて賞讃せらる。七　更にアキオルの云いし所も隱れなく、汝が命じて彼に對し爲さしめ給いしことも、我等之を知らざるにあらず。1)八　夫れ、我等の天主が罪を憤りて、民に向かいその預言者等により、彼等をその罪の爲に付さんと告げ給いしことは確實なり。九　しかしてイスラエルの裔等は、その天主を怒らせ奉りたることを知る故に、汝を恐るる念、彼等に臨めり。一〇　剩え饑饉も亦彼等を襲い、水の不足によりて彼等は既に死者の數に入らんとす。二　彼等はその家畜を殺してその血を飲まんとさえ圖りたり。2)三　また穀物、葡萄酒、油など、主彼等の天主の聖物

第十一章

1) 本五・五。

2) これを飲むことは利一七・一〇に禁じてあつた。

にして、天主が彼等に觸るべからずと命じ給いし物、是等をも彼等は用いん。
一三 と思い、且その手を觸るべからざる物をも食い盡さんと欲したり。されば彼等は是等の事どもをなしたるに由り、必ず見棄てられて滅ぶべし。一三 汝の婢我之を知りたれば、彼等の許より遁れ來れり、かくて主、是等の事を汝に告げしめんとて、我を遣し給いしなり。一四 夫れ、汝の婢我は汝の許に在る今と
一五 雖も天主を崇む、されば汝の婢出で行きて、天主に祈らん。一五 然らば彼、何時彼等にその罪を報い給うべきかを我に云い給わん、我即ち來りて汝に告ぐる所あるべし、かくの如くにして我汝を導き、イエルサレムの中を通らしめん、汝は牧者なき羊の如きイスラエルの民を悉く得給うべく、一頭の犬だも
一六 汝に向かいて吠ゆることあらじ、3) 一六 其は是等の事、天主の御攝理によりて我に告げられたればなり。4)
一七 また天主彼等に對して怒り給いたればこそ、我是等の事を汝に告げん爲に遣されたるなれ。」と。
一八 然るに是等の言はいずれもホロフェルネス及びその臣僕等の意に適いしかば、彼等彼女の才智に

3) 出一一・七と同じ云い方
4) 彼女が一種の巫女の如く云つたのは、それが昔は重んじられていたので、そう云えば信頼を博するだろうと思つたから。

一九 感嘆して、互に云いけるは、一九「眉目、美麗さ、また言の慧しきにかけて、かかる女はまたと世にあらじ。」と。二〇ホロフェルネス彼女に云いけるは、「汝を民の前に遣して、彼等を我等の手に付さしめんとしたる、天主の爲せる所や善し。三汝の約束甚だよろしきに由り、汝の天主もし我に之を爲さば、またそはわが天主たるべし。しかして汝はナブコドノソルの館にて大いなる者となり、汝の名は全世界に唱えられん。」と。[5]

第十二章

ユディット夜に出でて祈る—ホロフェルネスの饗宴。

一 「それより彼己が寶を置きたる處に、[1] 彼女を入らしめ、且其處に留らしめ、また己が食卓より彼女に分ち與うべき物を定めたり。二ユディイット彼に答えて云いけるは、「今我は、汝が我に與えよと命じ給いし物を食するを得ず、これ我に科を招かざらんためなり。[2] 我はただ、

第十二章 1)銀の器のおいてある所 2)即ち食堂。—2)偶像に献げたものの食事を共にするの

5)ユディットは過度の阿諛によつてホロフェルネスの信用を得ようと努めたが、それと同じく彼は之に對して欺瞞的約束をする。

三　わが携え來りし物を食せん。」三ホロフェルネス之に云いけるは、「もし汝の携え來りし物盡きなば、我等汝の爲に如何にかなすべき。」四ユディット云いけるは、「わが主君よ、汝の魂は活く、3)天主が我の志したる所をわが手によりてなしとげ給うまでは、4)汝の婢我、是等の物を悉く費やすことあらじ。」と。彼の僕等乃ち彼の命じたる天幕に彼女を導き入れたり。五その入るに當りて、彼女は、主に祈り願わん爲に、夜と夜明前とに5)外に出ずる許可を請えり。六よりて彼は彼女が三日の間、その意のままに出入して、その天主を礼拝するようにせよと、侍從に命じぬ。七是に於いて彼女は夜毎ベトゥリアの谷に出で行き、泉にて身を洗いしが、6)八上り行く時、主イスラエルの天主に、己がその民を救う道を拓き給わんことを祈れり。九かくて入るや、夕方己が食を攝るまで、潔齋を守りつつ天幕に留まれり。7)一〇然るに四日目に至り、

は、一種の偶像禮拜と見なされていた（士一一・一二。但一・八）。

3)舊約聖書に度々出てくる誓の語。―4)彼女は巫女らしく語る。

5)故に、いついかなる時にも。彼女はホロフェルネスを殺した後、確實に逃げられるようにする。―6)ユデア人及び異教にもある風習に從い、祈る前に身を清める儀式。出三〇・一七―二一参照。

7)彼女は斷食を續行する。

ホロフェルネスその臣僕等の爲に饗應を催し、己が侍從ワガオ[8]に云いける

一一　は、「行きてしかのヘブレオ人の女を說き、自ら進みて我と共に居ることを承諾せしめよ。二蓋しアッシリア人の間にては、女が男を愚弄し、身に觸れられずしてその許を去るが如きことを爲すは、恥ずべきことなればなり。」と。

一二　ニワガオ乃ちユディットの許に入りて云いけるは、「善き娘よ、わが主君の許に入るを羞うべからず、そは彼の面前にて尊ばれ、彼と共に食し、葡萄酒

一三　を飲みて樂しむを得べければなり。一三ユディット之に答えけるは、「我何者

一四　なれば、わが主君に抗言うを得んや。[9]一四その御眼に善しと見最上と見給うことは、我すべて之を爲さん。凡そその御意に適うことは、わが生涯のいつ

一五　の日にも我にとりて最善なるべし。」と。一五かくて彼女起ちてその衣服に身

一六　を飾り、入りて彼の面前に立てり。一六時にホロフェルネスの心激しく動けり、

一七　蓋し彼は彼女に對して情慾を燃やしたるなり。一七ホロフェルネス彼女に云いけるは、「いざ飲め、坐して樂しめよ、そは汝、わが前に寵愛を得たればな

8) ギリシヤ語バゴアスとはペルシヤの侍從の稱。

9) このすゝめはユディットに、解放の實現を圖る絶好の機會を與える。

一八　り。」一八ユディット云いけるは、「主君よ、我飲まん、そはわがいずれの日よりも、今日こそわが魂榮譽を得たればなり。」と。10)一九しかして彼女は彼の前にて、己の婢のわが爲に用意したる物を取り、且食し且飲めり。二〇ホロフェルネスは彼女の爲に樂しみて、生れて以來曾て飲みしことなきほど多量の葡萄酒を飲みぬ。

10)こうして彼女は祈つた結果として、律法に反する要求を悉く斥けることができ、天主が暴力に自分の負けるのをお容しにならぬであろうとの信頼を得た。

第十三章

ユディット、ホロフェルネスの首を斬りて、ベトウリアに歸る。

一　一かくて夜も更けたるに、彼の僕等その天幕に急ぎ來りしかば、ワガオ寢室の戸を閉じて立去れり。1)二さて人々は皆葡萄酒に醉い痴れたり、三ユディットは獨り寢室に在りき。四またホロフェルネスはその床に臥して、太く醉いしまま五に熟睡せり。四時にユディット、その婢にかの寢室の前の

第十三章　1)ギリシヤ語本によれば、彼女は自分のホロフェルネスの天幕を立ち去るのが唐突でないよう、その夜出かけることを、ワガオに云つておいたと。

六　外に立ちて見まもるべしと云いたり。六しかしてユディット、床の前に立ち、
七　涙ながら微かに唇を動かし祈りて、七云いけるは、「主イスラエルの天主よ、我に力を添え、この時に當りわが手の爲す所を眷顧み給いて、汝の約し給いし如く、汝の都イェルサレムを興し、且我をして、汝により爲すを得べしと
八　信じて志したる所を成就せしめ給え。」と。八彼女かく云い終りて、彼の臥床
九　の枕頭にある柱の所に行き、其處に紐にて繫かれる劍を取り外し、九それを
抜き放つや、彼の頭髪を掴みて云いけるは、「主なる天主よ、この時に當り
一〇　我に力を添え給え。」と。一〇しかして彼女は二度彼の頸を擊ち、その頭を斬
一一　り落し、彼の天蓋を柱より取り外し、その首なき屍を轉し退けたり。一一少時
の後、彼女は出でてホロフェルネスの首を已が婢に渡し、それをその嚢に入
一二　れんことを之に命じたり。一二次いで二人はその習慣のままに、恰も祈禱に
一三　赴くが如く、立出でて陣中を通り、谷を迂回りて市の門に到れり。一三ユディ
ット石垣の番兵に遠方より云いけるは、「門を開け、そは御力をイスラエル

2) 婢が毎朝ユディットの洗い物をするのに器を入れて出し入れしたのはこの同じ袋であった。故にそれが少しも人の疑いを惹かなかったのである。

一四　に示し給いし天主、我等と共に在せばなり。」と。一四人々その聲を聞くや、市の長老等
一五　を呼び、一五最小さき者より最大いなる者に至るまで、皆共に彼女の許に馳せ行けり、そ
一六　は彼等、かく早くは彼女歸らざるべしと思い居たりしが故なり。一六人々は明りを點して
　　皆彼女の周圍を取巻きぬ。彼女は高き處に上りて、沈默を命じたり。かくてすべての人
一七　默するに及び、一七ユディット云いけるは、「主我等の天主を稱えよ、彼は之に依賴む者
一八　を棄て給わず、一八そのイスラエルの家に約し給える御憐憫を、御召使なる我によりて果
一九　しその民の敵を今夜わが手によりて殺し給えり。」と。一九次いで嚢よりホロフェルネス
　　の首を取出し、彼等に示して云いけらく、「アッシリア軍の總帥ホロフェルネスの首を
　　見よ、また彼が醉いて臥しおりし處の天蓋を見よ、主我等の天主は彼處にて彼を女の手
二〇　により討ち取り給いしなり。二〇その主は活き給う、實にその御使は、わが此處を立出で
　　し時にも、彼處に留まりし間にも、また彼處より此處に歸り來りし時にも、我を護りた
　　りき。かくて主はその婢なる我の汚さるるを容し給わず、また我を召して、罪の汚れな
　　く主の御勝利とわが脫出と汝等の解放とを喜びつつ、汝等の許に歸らしめ給いしなり。

二一　二二　汝等擧りて主に感謝せよ、彼は仁慈深く在し、その御憐憫は代々に存すればなり。」と。[3] 二三　是に於いて一同主を禮拜し、彼女に云いけるは、「主はその御力もて汝を祝し給えり、そは汝により

二三　て我等の敵を滅ぼし給いたればなり。」と。　二三　またイスラエルの民の侯なるオジア、[4] 彼女に云いけるは、「娘よ、汝は地上のすべ

二四　ての女に優りて、最高き天主なる主に祝せられたり。　二四　天地を創り給いし主、汝を導きて我等の敵の將帥の首級を擧げしめ給いし

二五　者は讃むべきかな。[5]　二五　そは、汝が同族の困苦と患難との爲に、己が生命を惜しまずして、我等の天主の御眼前に滅亡を免れしめ

二六　たるに對し、主今日汝の名をかくも大いならしめ給いしかば、汝の讃稱人々の口に絶えずして、彼等永久に主の御力を記憶すべけ

二七　ればなり。」と。　二六　時に民擧りて、「然あれかし、然あれかし。」と應えたり。　二七　やがてアキオル召されて[6] 來りしに、ユディット

[3] 詩一〇五・一。一〇六・一。―[4] オジアはベトウリアの長（六・一一）に過ぎなかつたが、そこから全國の解放が始まつたので、「イスラエルの民の侯」という榮ある稱號を以てよばれる。―[5] 聖マリアが原罪を免かれ地獄の蛇の頭を踏み碎き給うたことでは、ユディットがその前表になつた。故にこゝ及び次の言葉は無原罪の聖母に適用される。―[6] 七十人譯によれば、ユディットが述べた要請に應

二八　之に云いけるは、「イスラエルの天主、即ち汝がその敵に復讐し給うことを證言し奉りし者は、今夜わが手によりて、すべての信ぜざる者の首を打ち給えり。[7]　二八　汝、その然るを了らんが爲に、ホロフェルネスの首を見よ、是ぞ即ち慢心し傲りて、イスラエルの天主を侮り、汝を殺すと脅かし、〝イスラエルの民の捕われん時、我命じて汝の脇腹を、劍もて刺し貫かしめん。〟と云いし者なる。」と。

二九　然るにアキオルはホロフェルネスの首を見るや、恐れ戰きて地に俯伏しに倒れ、その魂いたく亂れたり。三〇　されど彼再び氣を取直すに及び、彼女の足許に平伏し之に敬禮して云いけるは、三一　「汝はヤコブのすべての幕屋に於いて、汝の天主に祝せられよかし、其は汝の名を聞かんいずれの國民の間にも、汝の爲にイスラエルの天主は稱えられ給うべければなり。」と。

じて。彼は集合の理由を知らなかつたからか、或は全く自由を奪われていたからか、群衆と共に馳せ集まらなかつたのである（一五節）。―[7]ユディットは、その後のアッシリア軍の潰滅を豫見している。

第十四章

イスラエル人アッシリア人を攻む—アッシリア人、総帥の殺されたるを見ていたく恐る。

一 一時にユディット、民一同に云いけるは、「同胞よ、わが言を聽け、この首を我等の石垣の上に梟けよ、1)しかして日出でなば、各人その武器を執り、短兵急に打つて出で、下に降り行くに非ずして、恰も攻撃を加うる如くにすべし。

二 然らば間者等は必ずその大將の許に馳せ行き、之を起して鬪わんとするならん。

三 かくて彼等の諸將、ホロフェルネスの天幕に馳せ行き、その首なき屍の血に塗れて轉べるを見ば、恐怖の念彼等を襲うべし。

四 汝等、彼等の逃ぐるを知らば、安んじて之が後を追え、そは主彼等を汝等の足下に蹂躙せしめ給うべければなり。」と。

五 その時アキオル、イスラエルの天主の顯し給える御力を見るや、異邦人の習慣を棄てて天主を信じ、已が陽皮の肉を割りて、イスラエルの民の中に加わりぬ。その一族の子孫も皆、然なして今

第十四章

1) ダヴィドもかように、ゴリアトの首を梟けて、フィリスト人を敗走させた。

七　日に及べり。(2) さて彼等は日昇るや直に、ホロフェルネスの首を石垣の上に梟けたり。しかして各人その武器を執り、大いに騒ぎ鬨の聲を

八　擧げつつ打つて出でぬ。八 間者等之を見るや、ホロフェルネスの天幕に馳せ行きたり。九 よりてその天幕の中にありし人々、來りて彼を起さんと寢室の入口の前にて物音を立て、故意に彼の眠りを破らんとしたり、是、ホロフェルネスを、呼び起さずして、物音によりて目覺めしめんが爲なりき。一〇 蓋し、敢てアッシリア人中の權勢者の寢室を叩き、もしくは之を開きて入り行く者、一人もあらざりしなり。一一 されど彼の部將、千夫長、その他アッシリア王の軍勢の諸々の長等來るに及びて、彼等侍從に云いけるは、一二 入りて彼を起せ、かの鼠輩その穴を出で來りて、小癪にも我等に戰いを挑みおればなり。」と。(3) 一三 ワガオ乃ち彼の寢室に入り行き、帷の前に立ちて、手を拍ち鳴らせり。蓋は彼、これがユディットと共に眠れりと思いたればなり。一四 然るに

耳を澄ませども、臥したる者の何の動きも聞えざりしかば、彼、帳に近寄りて之を掲げ見たるに、ホロフェルネスの首なき屍体、その血に塗れて地に臥したり、是に於いて彼大聲を擧げて泣き叫び、且己が衣服を裂けり。一五 次いで彼、ユディットの天幕に入り行きしに、彼女見當らざりしかば、民の許に馳せ出でて、一六 云いけるは、「ヘブレオ人の一人の女、ナブコドノソル王の館を騒がしたるぞ、見よ、寔にホロフェルネス地に倒れ臥して、しかも之にその首なし。」と。一七 アッシリア軍の諸將之を聽くや、皆その衣服を裂きけるが、耐え難き恐怖と戰慄、彼等を襲いて、その心太く擾れたり。一八 かくて彼等の陣中には、聲えん方なき號泣起りぬ。

第十五章

アッシリア人逃走す―ヘブレオ人之を追擊して數多の戰利品を獲得す。

一 さて全軍ホロフェルネスが首を刎ねられたる由を聞くや、勇氣も分別も彼等より失せ果てて、戰慄と恐怖とに驅られ、ひたすら逃れて身を全うせんとのみ思いぬ。 二 されば誰もその隣人に告げずして、頭を垂れ、一切を後に遺したるまま、急ぎヘブレオ人等よ

三　り遁れんとしたり、そは彼等、その武器を執りて攻め來る由を聞きたれば
四　なり。かくて彼等は野の道及び丘の小徑より逃げ行けり。1) 三イスラエルの裔等乃ち彼等の逃げ走るを見て、之を追い、喇叭を吹鳴らし鬨の聲を擧げつつ、その後より下り行きぬ。四時にアッシリア人は一
五　團とならずして、ひたすら逃走を急ぎしが、イスラエルの裔等は之に反し一隊となりて追い迫り、見當る者共を悉く殪したり。五是に於い
六　てオジア、イスラエルのすべての市々州々に使者を遣せり。六よりていずれの州もいずれの邑も、選りすぐりたる壯丁に武裝せしめて、之
七　を彼等の後より遣しければ、是等の者、劍の刃もて彼等を逐い、その國境の極端にまで2) 至りぬ。七またベトゥリアにおる殘餘の者共は、
八　アッシリア人の陣營に入り、アッシリア人が逃ぐるに當りて遺しおきたる獲物を持ち去りしが、その負える荷は夥しかりき。八さて勝利者となりてベトゥリアに帰りし人々は、己が有となりし物を悉く携え來

第十五章　1) この周章狼狽の大混亂の理由は、ホロフェルネスの死だけでは不十分。ユデア人の襲撃でも同様。天主御自身がアッシリア人の勇氣と力とを奪い去り給うたのである恰も王下七・六において曾てシリア人に對しそうされたように。

2) ユデア國の境界まで。

りしかば、その大小の家畜及びあらゆる動産數知れず、爲に小なる者より大なる者に至るまで、皆その獲物によりて富裕となりしほどなりき。九 折しも大司祭ヨアキム3)その長老等一同と共に、ユディットに會見せんとて、イエルサレムよりベトゥリアに來りしが、一〇 彼女が彼の許に出で來るや、彼等異口同音に之を稱えて云いけるは、「汝はイェルサレムの光榮、汝はイスラエルの歡喜、汝は我等の民の名譽なり。4) 一一 そは汝、雄々しく振舞い、且貞潔を愛して汝の夫の後にはまた他に誰をも知らざりしに由り、5) 汝の心强かりければなり。是故に主の御手汝に力を賜いぬ、又是故に汝永久に稱えらるべし。」と。一二 時に民擧りて、「然あれかし、然あれかし。」と云えり。一三 イスラエルの民が、アッシリア人よりの獲物を搬び集むるには、殆ど三十日を

3) 本四・一一にはエリアキムという名になつている。兩方共に意味は同一で、「天主引き立て給う」の義。4) イエルサレムとはまず主を禮拜する場所を云い、次に更に廣い意味でユディットの故國、ユデアをさし、最後になおも語の適用範圍を擴大して、ユダ、イスラエル兩國を抱括する、ヘブレオ人の全民族を意味する。聖會は本文を聖マリアに適用しているが、聖母はこの意味をユディットよりも立派に實現し給うた。5) 彼女が天主に、アッシリア人に對するイスラエル救濟の道具に選まれた理由。

一四費しても、なお足らざるほどなりき。一四さてホロフェルネスの財産なりと認められたるものは悉く、金銀も衣服寶石も、またあらゆる家財道具も、人々ユディットに之を與えたり、即ち是等はすべて民より彼女に贈られしなり。一五かくて民皆、女、處女、[6] 青年も共に、樂器や小琴を奏でて喜びたり。

[6] 女や處女は舞や歌で公然勝祝いに参加する習慣であつた（士一一・三四。母上一八・六—七参照）。この場合は一婦人が戰勝の契機となつた雄々しい行爲をなしとげたのであるから、なおさらのことであつた。

第十六章

ユディットの歌—その高德の生涯と永眠。

一その時ユディット、主に向かいて次の歌を唱えり、曰く

二汝等、鼓を執りて主に聲擧げよ、鐃鉢を執りて主に歌唱え、彼に新しき讃歌を奏で奉れ、その御名を且稱え、且呼び奉れ。[1] 三主は戰爭を抑え止め給えり、主こそその御名なれ。四主は御民の中にその陣營を置き、以て我等の諸々の

[1] ハベルの妻ヤヘルがシサラを殪した後のデッボラの戰勝の歌参照。十五・二以下。

五　敵の手より、我等を救い出し給えり。五アッシリア人は、夥しき兵力を
率いて北より山々を出て来れり、その大軍は溪流を塞め、その馬は谷を
蔽いぬ。[2] 六彼はわが領土を燒き、わが壯丁等を刃に屠り、わが幼兒を獲
物に、わが處女等を捕虜になさんと云えり。七されど全能なる主は、彼
を擊ち、彼を女の手に付して、之を刺し貫かしめ給いぬ。八夫れ、彼等
の偉大なる者は、若者等によりて殪れしに非ず、またティタンの裔等[3]
之を討ちしにも非ず、丈高き巨人之に敵對いしにも非ず、メラリの娘ユ
ディットこそ、その顏の美しきによりて、之を蕩かし去りたるなれ。
九即ち彼女は、イスラエルの裔等を慨ばしめんとて、その寡婦の衣服を
脫ぎ、身に晴着を纏い、一〇面に油を塗り、髮を結いて頭帽を戴き、彼を
欺かんとて新しき衣服を着けたり。一一その咨は彼の眼を奪い、その美麗
は彼の心を捕虜となしぬ、かくて彼女は彼の首を劍もて刎ねたり。一二ペ
ルシャ人はその勇ましきに、メデア人はその猛きに戰けり。[4] 一三時にア

2) 本二・一一及び王下一九・二四参照。―3)「ティタンの裔等」は聖書で普通「勇士」という語が使われる所に代用されるラテン語特有の語ヘブレオ語ではベネ・ラファまたはラファイム

4) ペルシャ人とメデア人はアッシリア軍の援兵であつた。彼らはすべての中で最も勇猛殘忍な

ッシリア人の陣營は、わが賤しき者共の渴に瘁れて現るるや、叫べり。
一四 若き女たちの[5]子等は彼等を刺し貫き、之を逃げ去る小兒の如く殺せり。彼等は主わが天主の御面前に戰いて滅びぬ。一五 我等いざ主に讃歌を唱わん、我等の天主に新しき讃歌を唱わん。一六 主たる至高者よ、[6]汝は偉大にして、汝の御力により輝き給う。何者も汝に勝つ能わざるなり。一七 汝の創り給いしもの、皆汝に事うべし、そは、汝言い給いて是等成り、[7]汝御靈を遣し給いて是等創られ、汝の御聲に抗い得るものなければなり。一八 山々は水と共に、その基より動かん、岩々は汝の御面前に蠟の如くに熔けて流れん。[8]一九 されど汝を畏るる者は、一切に於いて汝の御許にて偉大なるべし。二〇 わが民に立ち逆う國民は禍なるかな、蓋は全能なる主、彼等に仇を報い給うべければなり。審判の日に主は來りて彼等を罰し給わん。二一 即ち彼等の肉を火と蛆とに與えて、彼等を燒き、永久に苦しましめ給うべし。」と。[9]二二 是等の事

者と思われていた
5) 即ち最も弱き者たちの。それに對して、武勇を誇っていた人々が小兒のように敗走した
6) 最高の主。
7) 創一。三。七。
8) 詩九六・五參照。九。各章參照。
9) この言葉の第一の意味は、天主の選民イスラエルの敵が、もし後の世まで天主に罰を留保されているのでなければ、この世で罰せられるとい

二三　ありてより戰勝の後、民皆主を拜せんとてイエルサレムに來り、身を潔むるや直に、10)擧りて燔祭と誓いたる物、約束したる物とを献げたり。二三またユディットは、民が彼女に與えたるホロフェルネスのすべての武器と、自らその寢室より取り來りし天蓋とを献げて、忘却を防ぐ物となしぬ。11)

二四　かくて民は聖所の前にて樂しみ、ユディットと

二五　共に三月の間勝利の慶祝を行えり。二五さて是等の日の後、各人その家に歸りけるが、ユディットはベトウリアにて偉大なる者となり、遍くイスラエルの地にその名を知られたり。二六その勇德に加うるに、貞德も亦具わりて、彼女はその夫マナッセの歿りてより、一生の間男を知らざりき。二七ま

うのであるが、ヒエロニモやアウグスチノなどのような教父がたの解釋によれば聖書記者は一般に天主に背く者の永遠の罰をさしているのであると。―10)彼らがまず身を潔めなければならなかつたのは戰鬪で血を流し、埋葬の時や獲物を剝ぐ際に屍體に觸れたから。民九・一一以下。三一・一九。―11)敵の武器物の具や卓れた戰利品を奉納物として聖所に献げるのは異教　母上五・二）ならびにヘブレオ人の習慣であつた。母上二一・九。三一・一〇。ユディットはその献げた物がもはや使用のため取り出されぬよう、誓を立てた（利二七・二八參照）。その奉納物を聖殿に遺すことによつてこの戰勝を忘れさせぬようにするつもりであつたのである。

二八　た祝日には、大いに盛装を凝らして現れたり。
さて彼女は百五年の間その夫の家に居り、その
婢に暇をやりて自由の身となしけるが、ついに歿
二九　りてベトウリアに已が夫と共に葬られぬ。時に
三〇　民、擧りて七日の間之を悼めり。12) 三〇 なおその生
ける間も、又その死後幾年も、イスラエルを騷が
三一　す者あらざりき。13 三一 更にこの勝利の祝日は、へ
ブレオ人によりて聖日の數に加えられ、その時よ
りユデア人に守られて今日に及べり。14)

12) 特別な尊敬の印（創五〇・一〇参照）。ギリシヤ語本ではあとに「彼女は死する前、夫マナッセのいと近き親戚と已が一族のいと近き緣者とに已が持物を分てり。」とある。―13) ユダ王國は西紀前六〇八年エジプト王ネカオがヨシア王に勝利を得るまで、當分の間外敵の來寇なく太平が續いた。―14) 本書編纂の時まで。後にユダ・マカベオがシリア人に勝つた時その戰勝記念祝日が、これの代りに設定された。